

上田貴子著

『奉天の近代

移民社会における商会・企業・善堂』

吉澤 誠一郎

奉天とは、今日では瀋陽と呼ばれる都市の旧名である。さらに言えば清朝の時代には、陪都の特別な地位を与えられて盛京と称されていた^①。このうち、奉天の名称が、日本では最もよく知られているかもしれない。それは、二〇世紀前半の日本人が満洲について関心をもつとき、しばしば奉天という都市が視野に入ってきたからに、他ならない。

とはいえ、本書が「奉天の近代」と題するのは、必ずしも日本での知名度に従ったものではない。むしろ、清朝末期以降、「奉天」という名がつかわれた時期は、強い地域主義に牽引され、独自の制度改革・産業育成・経済発展がめざされた^②（本書三頁）のであり、「地域主義を優先した「近代化」が行われた時代がこのまちの「奉天時代」なのである」（同前）という、歴史的な位置づけを踏まえたうえで、この題名が選択されていることになる。

なお、満州事変以降は考察対象とされていない。

著者の上田氏は、序章において、先人の研究史を振り返りながら、本書の課題を提示する。「いずれの研究も実は現地で生きる人々の社会にある論理や規範に接近しきれていないという限界が

ある。その大きな要因は戦前に行われた日本やロシアといった外国側の調査や研究に依存しているためである」（本書九頁）。著者の指摘に拠れば、外国の観察者にとつて重要と思われない要素は、正當に位置づけられずに情報から抜け落ちてしまうという。

著者はさらに、中国史の立場からの分析は、社会それ自体の内発的な問題よりもナショナルリズムの担い手としての社会がどのようにに形成されていくのかに関心が向けられる傾向があり、また中国で発表された研究では地域社会の論理は中国人にとつて当たり前すぎて注目されずにいると指摘する。また、ロシア人・朝鮮人・モンゴル人などを含み込む地域の特性を強調する研究視角には、「漢人社会が二〇世紀を通じて拡大していること、その規模が最も大きいことが捨象され、東北の多様性の発見や再確認で知的好奇心が満たされてしまいがちになるという落とし穴」（本書一〇頁）があるとする。

そこで、本書は奉天の地域社会を分析するために、商工業者が結集した総商会、奉天における企業経営、そして都市下層民を保護する慈善団体に注目し、遼寧省檔案館に所蔵される中国語文書を活用しながら考察を進めていくことになる。

本書は三部に分かれたれ、各々が数章から成っている。第一部は奉天総商会について論じる。奉天には街区ごとのまとまりを基盤にした公議会という商人組織があった。清朝最末期、全国的に総商会が設置されるなか、奉天では公議会を奉天総商会に改組しようとする政権側の意向はあったが、公議会はこれに反撥し、紆余曲折を経てようやく奉天総商会が成立した（第一章）。商会は奉天の経済界の指導層が結集する場として地位を安定させていくが、

一九一二年には零細な製造業者をたばねる組織として工会が成立して、しばしば商会对抗する動きを示した(第二章)。省政府の指令にもとづいて工会が商会に合流した後、一九二四年の商会長の選挙では、張志良が当選した。張志良は張作霖政権と密接な関係を持ちながら新興企業を経営する「権力性商人」といふべき人物であり、このような商会の指導者の交代は、雑貨業などを担う山東出身者グループの力が弱まり、輸入代替をめざす新興企業経営者が抬頭した結果であった(第三章)。奉天の政権を掌握した張学良は南京国民政府に合流する姿勢を示したので、商会についても全国と同様の改組が求められた。しかし、実質としては、これまで同様に、輸入代替をめざす新興企業を率いる権力性商人による商会運営が続いていた(第四章)。一九二四年、奉天総商會は、吉林省および黒竜江省の総商會との連携組織として東三省商會聯合会を発足させた。これもまた張作霖政権を後ろ盾とする張志良の施策であり、東三省における奉天総商會の優位性を示すものであった(第五章)。

つづく第二部は、奉天における企業経営の実状を分析したものである。まず、石田興平の古典的研究に基づいて、大豆の集荷と輸出、綿布などの輸入品の販売、それらを機能させる金融について、年代をおって変化するモデルを提示する(第六章)。政府系金融機関を代表する東三省官銀号は、省の官金を扱うとともに、農村で広く使われる奉天票を発行していた。さらには附帯事業として大豆などの流通にも関与して利益をあげていた。それだけでなく、官銀号に関係する有力者も大豆などの取り引きによって資本を蓄積し、それを輸入代替製産業に投資することが多く見られ

た(第七章)。そのような製産業の好例と言えるのが奉天紡紗廠である。一九二三年に開業された奉天紡紗廠は、当初は省財政から多額の出資を受け、奉天省の原棉を安く購入することで経営を軌道に乗せていった(第八章)。一九二〇年代後半期のうち不況の時期における企業倒産について見ると、零細資本の倒産が多数あり、とくに織布などの零細工場が経営を圧迫されていたことがわかる。他方で、山東人としての同郷の紐帯を維持する雑貨商は比較的安定した経営を行っていた(第九章)。

最後の第三部は、慈善団体の考察にあてられる。棲流所・貧民収容所は流入する貧民へのとりあえずの対応をするために設置され、貧民習芸所・教養工廠は定職をもたない者に職業教育を施すことを意図していた。これらの施設が受け入れたのは、浮浪して社会不安を醸成しかねないとみなされた人々であった(第十章)。娼婦・妓女、そして誘拐や家庭内暴力の女性被害者を収容したのが済良所である。女性の言いが正当と認められた場合には済良所で教育を受け、一般男性と結婚することになった。奉天の場合には、その結婚相手のなかに公務員が多くみられる(第十一章)。以上のような様々な施設を統合しているのが、一八九六年に成立した奉天同善堂である。この時点から、政府の監督を明確に受けようになったが、経費負担の重さから破綻の危機を迎えつつあった。民国初年に堂長となった王有台は政府中枢にある王永江の支持を受けて、同善堂の改革を進め、財政基盤の健全化にも努めた(第十二章)。

終章では、本書の論点をまとめたいうえで、「移民労働力が産業の成長を支え、成長した産業の富を権力が吸い上げ、都市インフ

ラも含めた移民社会の整備を行い、その繁栄がさらに移民を呼びよせた。このサイクルによって近代東北地域は成長し続け、軍勢力を高めた中国における地位を高めた。この循環を回すには政府の介入は避けられない」（本書三〇九頁）と指摘する。こうして、「自発的に生まれつつある公共空間を抑えこむ強さ」をもった「権力の強力な指導」が奉天の近代にとって必要とされたのだ（同前）ということになる。

ここまで、本書の豊富な内容を大筋のみに着目して要約してきた。とはいえ、本書の魅力は、きわめて具体的な実例の提示にある。たとえば、一九二七年に倒産した企業の一覧（本書一九五頁）や済良所の収容者の一覧（本書二四六―二五〇頁）は、前者は文書史料、後者は済良所の業務報告書から作成したものである。そして、商会・企業・善堂の三つの組織を手がかりとしながら、奉天の社会について接近する方法そのものが有効性を発揮していると思われる。以下では本書の三部構成におおむね即しながら本書の主張の意味について考えてみたい。

まず、第一部の主題とされた商会については、一九九〇年代以降の中国近代史研究のなかで大きな関心が向けられてきたものの、今日に至るまであまり明快な歴史的位置づけに至っていないと、私は考えている。なかでも政権と商会との関係をどのように理解するのかがということは、大きな論点となってきた。そのほかにも、商会が都市の経済秩序形成にとってどのような歴史的役割を果たしたのか、商会が有資格者の選挙によってリーダーを決める組織原理をとっていたことを民主的な運営とみるべきかどうか、商会は如何なる人々の意見を集約しており、そこから排除されたのは

誰なのかなどの問いがある。いずれも、個別的な実証が深まるにつれて、各地の商会の多様性が認識されるようになる傾向にある。本書の商会に対する考察は、むしろそのような研究史を意識したうえで、奉天総商会について具体的に分析するという姿勢のもとで行なわれている。結論としては、張作霖・張學良政権と奉天総商会の関わりが深まっていく過程を明瞭に述べている。ただし、既存の商会研究と正面から対峙する姿勢は弱く、奉天総商会についての個別研究にとどまっているという印象は残る。^②

私が最も興味深く感じたのは、商会の前身にあたるものとして登場する公議会の性格であった。奉天の公議会は消火活動を行う街区ごとのまとまりを基礎としていて、その街区ごとの代表が集う十六道街公議会があったという（本書三四頁）。そもそも清代から民国にかけての都市について、基層の近隣組織をどのように考えたらよいか、未解決の問題として残されている。ここでは、治安維持や祭祀のための近隣組織として幾つかの事例が指摘されてきているものの、それらは個々別々の都市が特定の時点で有する基層組織にすぎないようでもある^③。もし十六道街公議会は、その名称のとおり十六の基層近隣組織が代表を出して運営したものであったとすれば、奉天の都市社会を理解するうえで大いに注目すべきであろう。

しかも、この十六道街が商会を組織する基礎にあったことが重要であろう。本書六九頁に掲げられた一九二三年の奉天総商会の幹事名簿から、幹事の選出母体は地縁的な十六の組織であろうと推測することはできる。著者によれば、一九二四年に商会長に当選した張志良が十六道街にあった商会の分会を整理統合し、各分

会の消防組織も総商会の直属とする改革を行っており、さらに一九三一年には同業団体から商会に代表を送るようになった（本書六六頁、八一頁）。

周知の通り、清末に成立した時点の商会は、それぞれの都市において主に同業団体のメンバーから構成されている場合が多かった。確かに経済的な力量に応じて、特定の業種が商会の指導権を掌握するということはあり得たとしても、奉天総商会における雑貨商のように一度に多くの幹事を輩出するということは考え難い。このことが意味するのは、奉天では、張志良が商会長になる一九二四年頃まで十六道街という消防・近隣組織が機能しており、そこを選出母体とする代表が商会の運営を担っていたということである。著者が強調するところの張志良の商会改革の意味も、都市の基層組織の改変にまで至るような大きな意義を有していたと理解できる。

さて、第二部の企業に関する考察であるが、権力性商人が大豆などの輸出に携わることを得た利益が、輸入代替をめざす新興企業に投資されていったという指摘が重要である。詳細な財務諸表を提示した奉天紡紗廠の事例分析も意義深い（ただし、作表の過程で多くの不備が生じていることは残念である）^④。一九二三年に開業した奉天紡紗廠の経営が好調であった理由について、資本の過半が省財政から出資されたのに加えて民間資本も官主導で集められたこと、棉花は奉天省内で安価に買付けることができたこと、販路は在華紡と競争しながら東北の広範囲に市場を確保していたが、免税措置、および軍需品の需要という政府の影響に頼る側面もあったと指摘する。

注目したいのは、このような輸入代替工業化が地域経済に果たした役割である。一九一九年に奉天紡紗廠の設立が省議会で提案された際には、外国製品に対抗して国産品を製造することが目標とされていた（一四八頁）。しかし、結果としては一九二〇年代を通じて上海などの綿工業が発達してきたので、少なくとも紡績業については奉天紡紗廠はむしろ国内他地域の工場を好敵手とするようになったと見て良いだろう。本書一六〇頁に掲げられる表8-7によれば東北における綿糸の輸入量と移入量とは、いずれも一九二〇年代後半に減少の傾向を示している。表8-8からは、内外綿など奉天省にある在華紡と奉天紡紗廠の生産相数がいずれもおおむね増加の趨勢にあったことがわかる。これら奉天省内で生産される機械製綿糸を総計してもまだ国内の他地域から移入される綿糸の量には遠く及ばない程度とは言えるが、それでも国内の他地域から移入される綿糸に対して、奉天省内の生産によってある程度は対抗できるようになっていたことがわかる。すなわち、外国製品に対する輸入代替というより、国内の他地域からの移入代替の意味をもつ工業化が進んでいたことになる。

満洲事変の後の東北は、国内の他地域との経済的なつながりを弱めていくが、奉天省内での工業化は意図せずしてその布石となつたとも思われる。著者も「こうした従来からの奉天紡紗廠の事業方針とその経営展開は、結果として東北を中国から切り離そうという「満洲国」の方針と適合する側面を持っていた」（本書一六一頁）と指摘する。

第三部の同善堂については、多くの人の流入する都市社会において、一定のセーフティネットを提供していたという指摘に説得

力がある。

詳しく分析されている済良所については「現代的な表現をする」と女性のシェルターである」（二四一頁）と指摘されており、妓楼での虐待を受けた者、家庭内暴力を受けた者、誘拐された者などが救済の対象となった。また長期に収容された者には教育を施し、妻を求める男性の希望に応じて嫁に出すという役割を果たしていた。

本書二四六―二五〇頁の済良所収容者一覧を見ると、地方検察庁または高等検察庁から済良所に送られてきた女性がなぜ相当な人数いるのかという疑問を持つ。検察庁に身柄が置かれたということは、犯罪の被疑者であったと考えるのが自然であり、何らかの容疑で警察に逮捕され送検された者が多く含まれているはずである。しかも、検察から済良所に移された女性の多くは、誰かの妻となつて出所している。このことで私が想起するのは、老舎の短編小説「月牙兒」である。主人公は北京の娼婦であり、鑑札を持たない私娼であつたため、警察にとらえられ感化院に入れられる。上田氏の作成した表に見られる検察から済良所に来た女性も、これに似た私娼が多く含まれていたのではないか。老舎の描く感化院は、娼婦の更正施設の性格を強く有している。

さらにいえば、警察庁から済良所に一時的に移され、ふたたび警察庁に戻された事例も多い（本書二五三頁）。そのなかには、一九一七年八月五日のように一度に十名以上が送られた特殊な事態もあつた。これらも、自ら警察に保護を求めたというよりも、何らかの形で警察に捕らえられたと考える方が自然に思われる。誘拐の場合もあれば駆け落ちの場合もあつたはずで、おそらく妓

院も、妓女が逃亡した場合に何らかの理由をつくつて警察を利用しようとしたであろう。これらの場合には、双方の言い分が大きく食い違ふことになり、解決までに時日を要することも多い。被害者かもしれない女性を警察署に留置することはできないので、ひとまず身柄を預かる施設として済良所が活用されているとみることができる。

いづれにしても、済良所が警察や検察と密接に連携していたことは本書から明らかであり、他方で同善堂のなかで貧民収容に関わる諸施設も治安維持と関連していたことを著者は指摘している。それゆえ、「同善堂は政府が行政から切り離して活動させた外郭団体ともいえる」（本書二九六頁）というのは、妥当な結論として首肯できる。

これとも深く関係するが、本書全体の結論として「奉天において近代は権力の強力な指導抜きにして語れない」（三〇九頁）と述べられている。しかし、それは著者が強調するように二〇世紀に入つて顕著な動態を示した奉天社会の特殊な状況がもたらしたものののだろうか。私見では、行政権力が社会経済に大きく作用するようになることは、近代世界に広く見られることであり、この点で奉天の特殊性を本書が指摘するのには違和感がある。むしろ、本書が、ときどき言及する奉天の地域主義こそが最も面白い。それは、南京国民政府による商会再編政策を骨抜きにする瀋陽市商会の態度であり、また国産品愛用と称しながら実は上海などの工業化に対抗する結果になつた産業政策である。移民から成る社会における地域主義の形成という問題を考えるのに、奉天は好適な事例を提供するとも思われる。

ぐって」(『社会経済史学』六六巻五号、二〇〇一年)。

(A5判 三二七頁 二〇一八年二月 京都大学学術出版会

四〇〇〇円+税)

(東京大学大学院人文社会科学系研究科教授)

著者の問題意識として、奉天は「中国人社会の一筋縄ではないか
ない実力をひしひしと日本人に感じさせていた存在」(一〇頁)
であり、それも一つの理由となって満洲国の首都としては奉天で
はなく長春が選ばれたのではないかと述べている。このような
「中国人社会の一筋縄ではないか実力」は著者にとつては奉天
の個性を考える手がかりであろうが、実はその「実力」の拠って
きたるところの解明は、中国近代史研究にとつて基本的な課題で
あるともいえるのである。

① 実際には、さらに複雑な経緯がある。本書の序章を参照のこと。

② 私見では、これまでの商会研究における問いの立て方が十分に適切
なものであったのかという疑問はある。本書の姿勢も、もしかすると
私と同様の見解に由来するのかもしれない。

③ 今掘誠二『北平市民の自治構成』(文求堂、一九四七年)。陳克「十
九世紀末天津民間組織与城市控制管理系統」(『中国社会科学』一九八
九年六期)。Mingming Wang, "Place, Administration, and Territorial
Cults in Late Imperial China: A Case Study from South Fujian,"
Late Imperial China, Vol. 16, No.1, 1995.

④ たゞさは、一七一頁の貸借対照表では、固定資産と流動資産を分け
る線を引くことが必要であり、そうしないと下段の「流動資産計」が
何を合計したものか、誤解しやすい。また、利益は一七一頁に一回、
一七三頁に二回記されており、やはり難解に感じられる。

⑤ この表は単位表示を欠いているが、綿糸なので梱であろう。

⑥ なお、上海や天津の類似した施設については、以下を参照。Ruth
Rogaski, "Beyond Benevolence: A Confucian Women's Shelter in
Treaty-Port China," *Journal of Women's History*, vol. 8, no. 4, 1997.
岩間一弘「民国期上海の女性誘拐と救済—近代慈善事業の公共性をめ